

昭和三十年二月十日

財団法人人口問題研究会人口対策委員會
第二特別委員會第十五回議事速記錄

財団法人人口問題研究会

財団法人人口問題研究会人口対策委員会
 第二特別委員会第十五回議事速記録

日時 昭和三十年二月十日午前十時開会
 場所 厚生省人口問題研究所及長室

出席者

東京大学教授	幹	幹	幹	幹	幹	幹	委員	委員
泉	上	篠	永	渡	島	山	小	寺
	田	崎	井	辺	谷	本	山	尾
靖	正	信			寅		栄	致
一	夫	男	亨	定	雄	杉	三	磨

寺尾委員長　それでは泉さんにお話を伺うことにいたします。

泉靖一氏　今日はブラジルにおける日本人の移民の同化の問題について、御報告させていただきたいと思います。

同化ということは、アツシミレーシヨン、ポルトガル語のアツシミレーソンであります。この言葉はわれ／＼が考へてゐる以上に、入移民国と申しますか、移民を受入れる国としては、神を眞に考へるやうであります。従来何を考へて同化と言うかといふことは、いろ／＼むずかしい問題でございますが、従来は、言語と宗教と結婚といつたような三つのファクターで考へて、同化の速度を測つて来ておるやうであります。

これはアメリカにおきましては、アメリカに入つて来た諸民族が、この三要素においてどんなふうになつて行くかといふことを調査をいたしておるやうであります。ブラジルにおきましては、御承知のことと思ひますが、大統領の直轄地帯の移民民衆協会といふのがございまして、行政措置として、ブラジルに入つて来る外国移民の民族別の割合をコントロールしておるのであります。その審議会には、人類学者が非常に多くて、そこで主にそういう仕事をやつております。しかしながら、割合に同化に關する学問的な仕事は少いやうでございます。私の知つてゐる限りでは、ブラジル移民に關しましては、エミリー、オビリオンズ、その他のサンパウロ大学のドイツ語の教授でございますが、この人は同化の研究をいたしました。相当厚い本を出しております。なおこの人は、戦争中に、日本人移民の同化問題について相当広汎な調査をしております。そして、どういふものか知りませんが、日本人に対して非常に好意的な立場に立つて、日本人の問題に対して非常に弁護の筆をとつたりした人です。

惜しいことに、この人は一九五二年以来、アメリカのミシガン大学に籍をかえております。私ブラ

シルから帰りに、ミシガン大学に寄りまして、語ることを得たのでありますが、現在では移民の同化の問題にはあまり興味がなくなつて、南アメリカのコミンテイスタイターか何かに興味が移つてゐるようであります。とにかく実証的の仕事は非常に少いのであります。

ブラジルにおきましては、日本人が同化しにくい、キストを作る、キストというのは、ポルトガル語で「病巣」というような意味らしいのであります。健康な身体の中に異物が入つて、そこに疑り固つて、ニコリみだいなものを作るといふことを申しまして、これがやはり排日論の非常に強い理論的根拠になつてゐるのであります。

ちよつと面白い仕事があるのであります。

これはサンパウロに人文科学研究会というのがあります。これは向うの一世代しくは二世の若い人たちの學者の集りでございます。この人たちからブラジルの問題、あるいはブラジルの移民の問題に關して、共同の研究をして、そうして本を一年に一冊ずつくらい出してあります。

これは、オ一卷は、ブラジルの社会学という問題で、ブラジル社会の傾向を調査したものであります。オ二集を最近送つてくれましたが、これはブラジルの移民問題として、主として日本人の移民問題について論じてあります。そうして、たとえは憲法審議会における日本人移民論というそのを見ますと、戦後、憲法審議会において、憲法が新しくつくられるときに、日本人を移民として入れることはならぬということ、憲法の一系に加えようとしたのであります。その時における論戦の経過などは非常に面白いのであります。それは、出身地の如何を問はず、日本人移民の入国を一切禁止する、こういう項目を憲法の中に入れようとしたわけでありませう。ですから現在ブラジルは非常に好意を以つて、どん／＼受入れてくれると、われ／＼考へておりますけれども、背後にこんな動きが強くあるのであります。憲法審議会においてこの問題が出たのは、一九四六年のことでございます。決してそ

う皆のことではないのであります。十年足らず前のことと云ひます。暗流としては、先ほど申しました、日本の移民が同化しないかどうか。ブラジルの国民構成民族としては適當でないという考えが非常に盛くうかがわれてあります。

これはそういつた至過をいふん細かく書いてあります。案外日本で知らないから書きやすかったのかもしれません。

それで私自身ブラジルへ行つて、自分のテーマとして、日本人の同化問題を実証的に研究しようと思つたわけですありますが、その場合に、どういう立場から研究したかと申しますと、従来のように、言語、宗教、結婚、そんなような三つの項目から、その趨勢を見るといふのは、どちらんこれは重大であります。とつと日本人が祖国から拒つて行つた文化といふものを變化させて行く、その文化の變化するに従つて、性格の構造が變化し、考え方も變化する、またそういう變化の過程、過渡的の狀態の中で生れたところの子供といふものは、当筈別の人格構造を持つてゐるといふようなことから、パーソナリテイの變化といふところから、同化といふ問題をつかまえて行つたらどんなものだろうかと、いふところに、私の角度があつたわけです。

その結果につきましては、まだ十分に整理いたしておりませんけれども、ごく一部お手許にお配りしましたもの、これはローマの人口会談のとき提出せよと言われたので出した、ごくレジュメ的なものでございます。至者生活の冥途は十分時間がなくてやつたのであります。それから北伯の、丁度赤道直下のブラジル、いわゆるアマゾン地域の研究といたしまして、地域につきましては一応まとめたのでございます。最も日本人のたくさんおりますところの、少くとど三十一万以上おりますところの南ブラジルについては、まだ書ものにして出しておりません。今日は大体このローマの人口会談に発表いたしましたものを基にいたしまして、説明させていたきたいと思います。

ブラジルと申しまして、非常に広いわけでありますが、日本人が住んでおりますのは、大体において、人口の比率からいえば南の方でございます。南と申しますと、南緯二十三度半の線の付近に住んでおる、南回帰線の辺に住んでおるわけでありまして、この地域の地形は、海岸から急に山がございまして、非常に高原になった、なだらかな斜面を造つて、中央ブラジルへ向つて下つておる。従つてこの辺に住んでおるのではありませんから、標高からいうと、七百メートルから六百メートルでございまして、南緯二十三度半で、六、七百メートルというところ、北の方に持つて行きますと、台湾の嘉義の所が丁度北緯二十三度半で、阿里山の辺りが六、七百メートルですから、大体台湾の阿里山上あたりに住んでおるといふように御了解願へばいいと思ふのであります。

これらの人々は、大体におきまして、一九〇八年から一九四一年の間に移住した人々でございます。その人数はおそらく十九万四千と考へられております。

それだけの移民が、現在のくらしい人間があるだろうか、どんなふうに変化しておるだろうかといふ推算は、なかなかむづかしいのでございますが、荒つぱい推算をやつてみますと、結局、死亡率と出生率とから見ると、まず三十一万の日本人が住んでると言つていいんじゃないかと思ひます。

この南ブラジルの地域が、比較的日本人が集団して住んでおりました、主としてコーヒー、米、綿、蔬菜、さういった物の栽培に従事しております。それから今問題になつておりますアマゾン地区は、少し南ブラジルと違ひまして、二つの会社によつて過去において移民が行われたわけがあります。南拓貿易と、アマゾン産業会社、この二つによつて行われたわけがあります。入つた人の数は、今のところ總体的に、あまり人間がはつきりつかめませんけれども、南拓が入れた移民の数は、三百六十家族くらいであります。そのうち現在残つておるその六十家族という状態があります。三百家族が脱出してしまつておる。それからアマゾン産業の方は、若い、高等殖殖専門學校で訓練した独身

もしくは結婚したての人たちを入れたのであります。これまた、南米ほどひどくはないのであります。次、相当大きな離脱が認められる。ところが南ブラジルの場合は、戦争の關係もございましたと思ひますが、アメリカとは違ひまして、非常に出入りが少いのでございます。行つて帰つて来た人、どう仕事をして金を儲けたから帰るといふようぬ人が割合に少い。そして定着率が非常にいい、アマゾンの方は、従来の尸史から見まして、非常に定着率が低い場所であるといふことは事實であります。そこでこの二つの地域を一応とつてみたわけがあります。南ブラジルとアマゾンとは非常に対比的な位置にあるわけですが、左方は定着率がよく、右方は悪い、それから河口から千マイルくらいの間に、日本人が散在してゐる、左方は集中してゐる、いろいろな意味でこの二つを取上げてみますと、対照的な資料として興味があるのぢやないかと思ひます。

まず従来のように、言語、宗教といふようなそのを見て参りますと、どんなことになるかと申しますと、御承知のように、ブラジルはカンリツク国でありますが、一九〇八年から三十六年まで、ブラジルに着いた時における日本のカンリツクの率は、わずかに一・三三%であります。ところが一九五二年における南ブラジルの世帯主と奥さん、これのカンリツクの信徒率を見ますと、六・二%で、さう大きな宗教的な同化が見えないのであります。ところが一九五三年のノース・ブラジルのアダルト、これはアマゾン流域でございます、大人を見ますと三〇%カンリツクに歸依してあります。人口の低い所ほどカンリツクに轉ずる機会が多いといふことが、これでおほう気ながら申せるのぢやないかと思ひます。サウス・ブラジルのローマル、エリアの若い人たちは、二九・五%、都会は五六・九%、ノース・ブラジルの若い人は六五%といふうに同化して行く速度が、その地域や年令によつて違ひますからこの一三三%といふ数字を出せば、とにかく全くのキリストといふことになりましょう。またそれが四十年を経つて、わずかに六・二%、これはどうにもならぬキリストといふことになりましょう。

か、あとの方を見れば非常に大きな数になるわけがあります。分析をやる場合に、こういう細かい分析をやれば異った結果が出るのじゃないかと思ひます。

それから言葉でありますが、どんな言葉を使つておるかということでは分析することは困難のためにとにかく一応、日本語の文法を喋つてゐる限りは、日本語と判定する、ポルトガル語の文法を喋つてゐる限りは、一応ポルトガル語であると判定する。そういうことを前提といたしまして、家族の中をどんな言葉をお互いに話合つてゐるだろうかということの分析を、三百五十ぐらいの家族についてやつてみたのであります。ヘッドというのは世帯主であります。ヘッドと父母との向をどういふ言葉で話してゐるかというところ、九七%が日本語で話してゐる。三%が日本語とポルトガル語で話してゐる。これはサウス・ブラジルであります。ところが北の方に行きますと、九二%が日本語、八%が日本語とポルトガル語。それからヘッドとワイフとの向すなわち世帯主と妻との向となると、この率は、サウス・ブラジルでは変らないのであります。ノース・ブラジルでは、日本語で話してゐる人は七二%、ポルトガル語が一九%となつております。特にポルトガル語で話してゐる場合は、奥さんがブラジル人であるとき当然そうなるわけあります。それからヘッドの子供に向つての呼びかけになりますと、南ブラジルでは、九〇%は日本語で、日本語とポルトガル語のゴチヤノ、カ九%、ポルトガル語が一%、ノース・ブラジルでは、日本語を使つてゐるのが四五%、ゴチヤノ、カ二八%、ポルトガル語が二七%であります。それに対して子供がヘッドに対する答え方はずれて参ります。南ブラジルでは、日本語で話かけられて、八六%は日本語で答える、一〇%が日本語とポルトガル語、四%がポルトガル語。ノース・ブラジルに行きますと、さらにひどくなりまして、三三%、二四%、四三%となつております。そういうわけでは言葉も、ある層をとつてみますと、非常に変りにくいのであります。若い層になると非常に急激な速度で變つて行く。また日本人人口の非常に密集してゐない所では、非常に速度で變つ

て行くということが一応は言えるようでございます。

次に結婚の奨むでございますが、現地のブラジル人の子女との結婚は、やはり南ブラジルにおいてはまだ少いのであります。が北ブラジルにおきましては非常に高くなつて参りまして、特にこれは北ブラジルの方が若い独身者が行つた関係もござりまするが非常に高いのでござりまする。しかし南ブラジルの方は、まだ少い。これはちよつと数字を出すことができないのであります。

こういう人たちの精神的な構造と申しますか性格と申しますか、さういつたものをいろいろな角度から検討してみると、どういふことになるかと申しますと、まず移民のいろいろな行動といふのはある程度郷愁というサイコロシによつて影響されるところが多いのでございまして、たとえは、これはリオデジヤネイロなりサンパウロの写真屋に行つてみるとわかるのであります。日本人だと思つたら、必ず写真屋さんは日本の機軸を持って来て、これは日本の機軸だと言つて見せる。ドイツ人の移民に対しては、ドイツの機軸を見せるといふように、みな母国の機軸を売りつける。またさういふものを好んで買ふということが非常に見えるのであります。いろいろな意味を郷愁が移民生活の態度を決定して行くということが言えるのであります。

あとでお話いたします例の勝つた負けた事件と、一種の郷愁と見ていいわけでありませう。

それと今約五百人の世帯主及び主婦に対して、日本へ来たか、日本へ帰つて住みたいか、あるいは日本を訪問してみたいか、さういふことを聞いてみますと、日本へ来たくないという考え方を持つてゐる人たちは、南ブラジルにおいては一五・一%、北ブラジルにおいては二五・九%であります。ところが、とにかくブラジルには住んでおるが、何とかして訪ねてみたい、日本へ訪問してみたいという人が、金さえできたなら訪問してみたいというのが、南ブラジルにおいて六八%、北ブラジルにおいて七二%でございます。そのうち日本へ帰つて住みたい、ブラジルは厭気かきしたというのが一五・七%

が南ブラジル、それからノース・ブラジルが一〇%。この日本へ帰つて住みたいというのは、大部分は勝組の人で、日本がまだ勝つてると信じておるか、あるいは勝つてると信じなくて、少くとも負けたとは言いたくないという人たちであります。ですから、こういう人たちは、税金があれば一生働いた富の十分の一か二十分の一かを提げ、日本を訪ねて、死ぬまでの思い出しにしたいという人がずいぶんあるわけがあります。それでブラジルから現在相当たくさんの方が、訪日と称して日本へ帰つて来ておる。またこの一五%に当る人が一部帰国しております。こういう人たちが日本に落して行く金もバカにならないのであります。こんなふうには、日本におる人たちが、あいつはブラジルへ行つたが、どこへ行つちやつたか判らなくなつたというふうにお考へになつてゐるか少しもせんけれども、向うに行つてゐる人たちは、みなぞく日本に愛着を感じ、郷愁を感じておるといふことと言へると思ふのであります。

次に、そういった郷愁から離れて、衣食住というふうなもののについて、同化の方向を眺めてみますと、これはいわゆるアチーブ・スタイルでやつた場合と、観察でやつた場合と、大きな違いが出てくるのであります。たとえば、ここでブラジル流の料理と日本料理とどつちが好きですかといふことを言いますと、ブラジル料理が好きだ、しかし、時には日本料理がいい、といふような返事がずいぶんたくさん出てくる。あるいは、日本料理がいいが、時にはブラジル料理がいい、といふものも出てくる。しかし、しからはブラジル料理とは何さや、日本料理とは何ぞやといふことになる、実際は、彼らがブラジル料理と考へてゐるものと、彼らが日本料理と考へてゐるものと、あまり変らないのであります。南ブラジルにおきましては、北ブラジルにおきましては、中流以上の人は、ほとんど米を食べるのであります。主食は米でございます。それからブラジルであるか、スラジルのないか、料理のそれをどういふふうに区別するかと見ておりますと、米を豚の脂で炊いたようなもの、これをフエー

シヨーンと申しますが、それを食べるか食べないかということが、ブラジル料理と日本料理の境でありまして、従つて玉子とか肉はどつちにも入らない。日本料理とどブラジル料理とどつかないような考え方を持つております。ただフエーシヨーンを食べるか食べないか、あそこはフエーシヨーンを食べるかブラジル化されるというような奇妙なメルゲマンで持つて判断されております。結婚式など見えておりますと、最も出てくるのはノリマキであります。ノリマキが最も日本料理を象徴したもので、そのノリも日本からのノリが手に入らない場合が多くて、大抵はサントスの付近でとれた、板みたいなの、たいへんなノリであります。それをもつて、とにかくノリマキを作る。それから冬になりますと、向うはこつちの夏が冬であります。カズノコなど日本から輸出されて行くのであります。これまた傑作であります。カズノコを乾したのを、そのまゝお醤油をつけて出したり、ひどいのはトーチンカンな日本料理が出て参ります。しかし日本料理には違いないというような考え方が非常に強いわけがあります。

どれで結婚式を見ておりますと、まず教会で結婚式を挙げます。そのときは友だちが付いて行く。そして友だちを呼んで、そこで披露宴をやります。それはビールと何かです。豚の丸焼とか、そんなものです。その式が終ると、新郎新婦は、今度は場所をかえるのであります。今度はみんな日本人とお父さんお母さんたちと、日本食と日本酒で披露宴をやるといふふうには、食い違いがそのまま両方とも認められておるといふわけがあります。

ところが日本のキモノなんかはどうかと申しますと、食の方は比較的日本人のものかそれである方がありますが、衣服となると、日本のキモノを持つてくる人は着手はございしますが、現在ではどうもんなお祭の時でも、日本式のキモノが着られるということはない。ただ、ごくまれに、外交官の奥さんか正式のレセプションに日本のキモノを着て出るといふことはあるが、植民地ではそういうことは

ないわけがあります。

ところが、日本のキモノを着たいと思ひますか、という質問を出すとき、着たいという答がずいぶんある。しかし着たいと思つても、カーニバルの仮装でなければ着れないような環境にあるので着れないわけがあります。

それから家屋の装束は、日本の家、タタミの上に住んでみたいかという質問に対して、やはり、住んでみたいという人がたくさんあるわけです。事實私が訪れた植民地の中で、タタミのある家は、たつた一軒であります。しかもそのタタミの家はスキヤキのご馳走になりましたが、タタミはブワ／＼と湿つて、とこそコンフォタブルなものではなかつたのであります。誰にも、タタミの上でアグラをかきたいという気持はあるようですが、自分の家をつくる時分に、そういう欲望を満足させるやうな家をつくるわけには行かない。はなはだ非実用的であり、コストが高くかかるし、また、はたから奇妙キテレッツだというふうに言われるというやうなことがあるのであります。そういう状態、ほとんど見られない。ところがこの郷愁はとき／＼満足されるのであります。というのはどういふことかというとき、サンパウロの町には二十軒以上日本料理屋がございます。そこへ、奥地からコーヒーで儲けたやうな人たちが出かけて行つて、大尽蔵ぎをするのであります。その青柿という店には、タタミがちゃんど敷いてあつて、年取つたガイシヤのやうな人が一人おりました。シヤミセンを弾くわけであります。ところが唄う方の若い娘さんたちは、ほとんど日本語とポルトガル語と半分半分みたいなのでありますから、これまた奇妙キテレッツな歌になるわけであります。タタミのない日本料理屋は、大きなソファアがあるもので、その上に坐つて、やがてその上にアグラをかいて、日本酒を飲み、日本から来たそのヤツトと語つても何でコレコードをかける、これによつてわずかに郷愁を満足させる。

恐しく高いのでありますけれども、こういう状態はアメリカにも勿論たくさんあるわけであります。

それで日本のレコードが現在ほとんど出て二ヶ月目には、サンパウロに到着してあります。日本で流行った歌は、二ヶ月後には必ずサンパウロの日本人社会を風靡する、日本の雑誌も約二ヶ月遅れて参りますが、大変なものでございまして、雑誌と映画で約七十万ドルが日本から輸入されておるといふ状態でございます。これはみんな一種の郷愁だと思ふのであります。雑誌を調べてみますと、どういふものが多いかというところ、「主婦之友」「キンカ」「面白倶楽部」「講談倶楽部」などが主でありまして、「文芸春秋」を読む人はインテリであります。日本の書店も三、四軒ございしますが、日本の新刊書も、大部分は一冊は必ず向うに送られております。最もよく売れる本というところ、「生命の真相」といふような本でありまして、あとの本はそんなに売れないけれども、しかしさうかといつて、全然売れない本が売れないというわけではないようであります。そんなわけでは、衣食住における郷愁の向題というものが非常に明確な形をとつておるわけであります。

ところが、ここで私たちが思いますのは、オーストリアの人たちは、自分たちの生活に非常に強い郷愁が参る。ところが、二世ではどうかというと、むしろ二世に参る、日本的であれと希望する人々は非常に少い。ほとんどさういう希望をする人は、日本へ帰つて住みたいというような人々に限られておる。私一度驚いたのであります。バストスという日本人の植民地がございまして、そこに製糸工場がある。そこで日本人の女工さんがたくさん働いておるので、その人たちと会つたのですが、ある一人のお嬢さんは、お父さんが非常に頑固な人で、日本が勝つたというふうには教え込まれておる。その女の子自身は日本の字は読めないので、お父さんから教えられて、勝つたと思つておるのであります。それで毎日、日本へ帰るんだから、帰つた時には生らなければ、女としてはなはだ工合が悪いといふので、毎日ベッドの上で一時間坐らされるというのであります。しかし、さういふ人はさちろん

非常に稀で、全体の一刻くらいであります。ですから、二世に対しては、むしろブラジル社会において、何となくことに重点が置かれております。言葉について、日本語の教育に、あまり力が注がれない。日本へ帰りたい人を除くと、注がれずに、むしろポルトガル語の教育が進んで行くわけであり、従って二世の同化の速度はひどく速くなつてくる。その結果として、親と子の間の意見の疏通が、まったくできなくなつてしまふ。それどころか、家庭的な悲劇が起るようであります。

そこで十一パーセントありますが、あなたは子供たちに主として日本語とポルトガル語とどちらを教へようと思つておるか、という質問に対して、南ブラジルでは、年寄は日本語が一九・六%、ポルトガル語が五三・四%、これに対して若い人は、ポルトガル語が四一・八%で、むしろ日本語で主にやらなければならぬという考え方が多い、逆転してあるのであります。これは日本語が全然わからないから困るといふだけで、この数字は、そういう裏を読まなければならぬと思つてあります。

北ブラジルに行くと、年寄といふか大人の九四・一%までは、ポルトガル語を主としており、若い人の三八%がポルトガル語を主とし、五七%は、わからぬ、と答えてあります。全然日本語がわからないのです。少しぐらゐは知つていて、いいような気がするが、むずかしいし、わからないといふ答が、いふん出ております。そういう数字は単なる考え方であります。実際は二世の人の大部分は、日本語があまり上手でない、自由でない、または全然知らない、教育程度が高くなればなるほど、日本語が速かに喪失されておるといふ傾向にあるわけであり、ですから、大学に行つてみますと、日本人の二世の学生はたくさんおりますが、この人たちと日本語で話すことはむずかしい、私はポルトガル語がよく喋れないので、両方英語で喋るといふ奇妙なことをやらなければならぬといふ状態であり、ります。

しかし一審問題になりますのは、純粹のポルトガル語の教育といふか、ブラジルの教育を十分に受

けた人、あるいは並に、日本の教育を十分に受けた人、これはあまり問題ではないのであります。ブラジルで日本的教育を十分に受けるということは不可能に近い。そこで中間地帯が二世にあるわけです。どっちの教育も十分に受けなかつたという中間地帯、それは丁度戦争中に学校に通うような軍配に達した人であります。この人たちが非常に奇妙な性格を持つておりまして、特にコミュニケーションの面からいいますと、ポルトガルも自由に行けない、日本も自由に行けませんから、従つて自分の意思を十分に表明できない。ポルトガル語でもやれない、日本語でもやれない、海外からの言葉によるコミュニケーションもピンと入つて来ない。そこでその軍令層に一種の白痴——と言つて極端かもしれませんが、一種の奇妙キテレツな白痴に近い——精神的な力はあるのですが、言葉がでないために、十分に心の中に明りが灯されないうような、そういう層ができておるのであります。そうしてしばしば非常に熾激な国粹主義と結びつくことかまざりまして、いわゆる戦争が終つたときに、日本は勝つたんだ、負けたんだという議論が起つて、負けたという人々を暗殺した人は、大部分がこの層の人々であります。ですから、これは、ある一つの刺戟を与えてやると、それが全然反省されることなしに行動をある一定の方向に定めてしまふというやうなことが非常にはつきりした人々であります。勿論これはどんなふうにもなりますから、非常に危険な層であります。

同化の問題の最後の締めくくりといたしまして、勝つた負けたの事件というものが、皆さんご一体どういうことだというやうなお話があると思ひますので、ちよつと説明しておきたいと思ひます。

面白いことには、戦争が終つた直後には日本が負けたんだというコミュニケーションを、ほとんど全部が受けてるのであります。ところが、日本が負けたというコミュニケーションを受けてから、約十二時間くらい後になりました。日本は負けたんだやない、負けたやうに見せかけて、アメリカ力を日本本土へ近寄せて、そうして原子爆弾に代る高岡波爆弾という爆弾をそつて全部海底の藻屑と化し

てしまふ、それから今日本は攻悪に転じておるといふデタラメなニュースを出したわけであり、面白いことには、それを約九〇%が信じてしまつた。残りの一〇%が、そんなバカなことがあるかといふこと迄、対立が起つたのであります。この一〇%の人々は、主としてポルトガル語なり外国語のわかる人で、外国語の新聞を読む、あるいはラジオを聞くのであります。九〇%の人は、ポルトガル語のわからない人が多い。全部ではありませんが、多いのであります。戦争中、日本人は敵国人としていろ／＼圧迫されております。だから日本人としては、戦争が勝つたら今に見ろといふような気持ちが、心の中にあつたことは事實であります。勝つてもらいたいと思つたことと事實とあります。それこそ自分たちの希望していたような情報に惹びついてしまつた。そして、希望してはいないような情報をみずから除いてしまふといふわけで、九〇%、一〇%といふ対立が起つた。

ただこの九〇%の人々が組織されなかつたら何でぞなかつたのであります。それを臣道連盟といふものゝ組織化して行つたのであります。初めは主として情報を提供するセンターがあちこちにできまして、それが日本が勝つたといふ情報を提供する。それが臣道連盟になつて、百円くらいの会費を納めれば、どん／＼情報が届けるといふので、大部余の人が臣道連盟に加盟するといふ形になりました。この臣道連盟のリーダーといふのは、大体において日本の中学を出たような人、あるいは元軍人といふような人が主であります。大体はいわば一種の落伍者でありまして、いわゆるラジルの成功者は一人もおらないと言つていいのであります。九〇%の連盟員になつた人の中にはたくさんおりますが、指導者はみな若手者であります。一〇%の、日本は負けたといふ組の人は、多くは、昔の日本の外交官とか、あるいは移民会社のインテリとか、あるいは断で成功しておる人、そういう人たちであります。そこで、こういう人たちにひどい反響を感じて、そういう人たちは非国民である、だからこれは一掃しなければならぬといふことから、暗殺を指令いたしまして、死んだ人は相当たくさんは

ないのであります。然、狂我した人は百人に近い。それが暗殺隊によつて狙撃されたというような事件が起つてゐるのであります。

こうして勝つた負けたの対立はなくなりまして、仇敵のような状態になりました。膠着して参ります。ブラジルの官憲も、とにかく治安を乱すのは怪しからぬといふことばかりいまして、勝組に強い弾圧を加える、それです。対立する。憲法審議会を日本人の移民を禁止するといふ文句が挿入されかけたのは、その時代であります。

臣道連盟事件が、いわゆるキリスト論に火を点けたことになりました。そういう対立が長いこと続いておりました。私が参りました一九五二年三年におきました。この対立は妙な恰好になりました。一〇%の人たちは、日本は負けたという認識がある。九〇%のうち約八〇%は、日本が負けたことをだんだん知つて来たわけです。初めから、負けたという認識派とは喧嘩したために、どうしてもうまく行かない。これを強硬派といつて、親が病氣のとき、親が病氣だ病氣だと言つて歩くような子供は不孝者だ、日本が負けたときに、日本が負けた負けたと言つて歩くような日本人は不孝者だといふような奇妙な論理で、そういうイデオロギーをもつて対立してゐる。

残りの一〇%が一五%、これがまだ本當に日本が勝つたと信じてゐる。どうしても負けたとは信じない。勝つたと信じてゐるか、もしくは負けたとは信じられない。こういう三つのグループに分れて対立してゐります。どこの町に行つても、どこの農園に行つても、この三つの派は必ず厳として存在してゐる。日本人のクラブをつくるというやうな時、負くクラブに勝つクラブという二つをつくるというやうな奇妙なことが起つてゐるのであります。

その後この狂信派の一〇%はどうなつたかといひますと、これを躍らしておりました川崎三蔵とか加藤とかいう人々が逮捕されるに及びまして、漸次狂信的な勝組論が下火になつてあります。この

人たちは日本へ帰るものと考えていたが、圣洛的にまいったく行諾つてゐる人が多いのであります。それから勝組のいろ／＼な暗殺隊に対する寄付金とか何とかいうことで、相当の金を出させられた。そこでこれが賭骨に帰国組という形をとりました。いろ／＼な理窟をつけて帰国をさせろ、只で帰せ、船賃はないから只で帰せというようなことを言い出したり、あるいはそういう詐欺事件が頻々として起る。一例は、これはどういふわけか、どうも日本人のサイコロジイというものはわからないのです。最近、台湾を解放するために中共の義勇軍になるというグループがサンパウロにまきまして、これは勝組なんですよ、それが、中共の義勇軍となつて台湾解放をやるという連盟をつくつた。というのは、ブラジルは共産党が公認されていない。そこで、ブラジルで中共の義勇隊になるということは、共産党だということを表明することになる、そうすれば送還してくれよう、そうすれば金なしに日本へ帰れる、そういう義勇隊が出て来たり、それから国連に提訴することによつて、人権宣言によつて、人権の居住は自由だ、だから国連に提訴して、そして日本に居住したい、それは自由のはずだから、日本へ送ってくれということ提訴するという書類を作つて送るのが出てくるというやうな状態であります。

しかし底に流れてゐるのは、やはりどうしてブラジルの文化に完全に同化できない、そのことは非常に工合わるい、そういう気持ちで結局日本への愛着となつて、それが圣洛的な生活がうまく行かないことや、いろ／＼なことと結びつき、あるいは子供と親の関係とを結びついて現われて来ておるやうであります。ですから同化と一口に申しまして、いろ／＼な面から見ると、非常に複雑な構造がそこにございます。従つて日本人の同化論というものは、非常に同化しにくいという面があると同時に、ある年令をとつてみると、ひどく同化されてしまつて、日本的のものはすべて失われてしまふやうな度れがあるのであります。

ブラジルに行つて見ますと、イタリヤ移民とドイツ移民は、表面では少々同化する。ことにイタリヤ移民は、言葉が似ておりますから、私は十五日前に来たというイタリヤ人の女に会つたのであります。が、そのおかみさんが、その農園の支配人をつかまえて、家が汚いとか、飯がまずいとか、いろ／＼文句を言つておりました。とにかくイタリヤ語とポルトガル語の差の近さで、十五日目というのに一応のことは通じる、ところが日本人の移民だつたら、それだけのことを言うには、ずいぶん年が要る。そういう面から行くと、イタリヤ人などすぐ同化するわけではありません。宗教も大体カソリックの人が多いし、少々その中に差を込めよう。ところが二世、三世になつても、しばしばイタリヤ人意識というものがあつたのではありません。たとえば日本人は、二世になりますと、日本へ還るに勇気を持さうという人は、グツと減つて来ます。ところがイタリヤの二世は、金儲けたら必ずイタリヤへ帰つて、イタリヤの文化や自然を十分に味わいたいという態度に出てくるのであります。ですから日本人の一世の同化はきついものがありますが、二世になると、ガタンと同化してしまふ。急激に身も心も同化してしまいます。

ここに困つたことが起るのは、今までの日本人移民に期待して来たことは、農業技術であります。ところがサンパウロの近郊あたりで、養鶏、蔬菜栽培、イモ栽培、果樹それから造林、こういうものを主としてやつております、これらをも角的に組合せまして、そうして非常に効率のいい農業を営んでる日本人がたくさんございます。高慶の日本の農業技術を取入れて、あるいは林業、果樹の技術など取入れてやつております。ところが今言つたように、急激に同化してしまつた二世たちは、そういう技術を保持することができなくなつた。先に申しました、ある中間的な戦争によつて影響された二世たちは、とてその技術を保持することができない。それる今まで日本移民がブラジルに寄与し得たものが、あまり同化するることによつて、向うが期待するものがなくなつてしまふということもある

のであります。

それからまた、これは一方的に、日本の面から見れば、日本の品物を買つとか、日本へ旅行するこ
となど、二世になるとバツサリと減じてしまふ、こういうことが起つて来るようございませう、現在
は、平均の世帯主の年令がまだ南オラシルで四十七くらいですから、ここ十二、三年の間はどう大き
な変化はないと思ひますが、そのあとオラシルにおける日本人社会というものはまったく根本的に変
貌してしまふんじゃないか。たくさんゑはなくて、面断なく日本から新しい移民を送つておけば別
でありますか、このまま中断すれば、完全に変貌してしまふだろうと考へられるわけがあります。は
なはだ準備が不十分で不行届な話になりましたけれど、一応この辺で。

○小山委員 日本のお務、頁といふことを聞かれるわけはさうね。

○泉端一氏 もちろん始終席きに來ます。負けたと言ふより仕方がないです、あるとき勝組の会に招ば
れましたが、物凄いなの中にシープで連れて行かれました、泥壁の凄いな家で、取巻かれて、どうい
うのか詳しく説明しろと詰問されたことがございます。僕を案内して行つたやつが心配して、ほんと
に行くかと言ふんです。シープで案内して行つて、シープで待つていてくれた。一旦シープを帰した
んですが、また引返してくれましたね、その連中が三、四人拳銃を持っていてくれた、何か怒つたら
大変だといふので。そんなことが始終なんです。ある時なんか、農業協同組合の人が心配して、拳銃
を忍ばせて行つたことあります。とにかく私の行つた頃は、あまりよくなかつた。大宅さんなんか
は、それほどなかつたようですが、また私は奥へ入りましたからね、奥に行くほど、さういふの
が多いんです。町中の講演会なんか平気ですが、町から出た所へ行つてゐる時は、とても気が悪い
です。さういふ所へ調査に行くときは、昼飯を用意して行つて、一軒の家と一軒の家との間で飯を食
うようにしていました。御馳走はしてくれるのですが、話を聞くときは、勝つた負けたまゝは融れな

いで、最後に能れるということにしないと喧嘩になつてしまふ。僕自身をアメリカの二世たと言ふんです。だからアメリカに買収されて、日本が負けたと言ふんだと言ふんです。それで、そんなバカなことがあるかと言つて、パスポートを見せた。ところが僕は知らなかつたのですが、昔のパスポートは菊の御紋が入つていた、今のは違ふんです。だから、これはごせ物だと言ふんです。

○篠崎幹事 今、出生率はどのくらいですか。

○泉靖一氏 南ブラジルは出てきませんが、北ブラジルでは、三十才から四十四才までの女が、六人の子供を持つております。四十五才以上はほぼ同じです。

○篠崎幹事 すると、二世が同化が早いというのは、ブラジル人を娶ることが多いわけですか。

○泉靖一氏 それは非婚に少いのです。日本人を娶るんです。ところが、物の考え方とか、言葉とか、二世は丁度同じレベルになる、それを結婚するわけです。だからブラジル人とどつかず、日本人とどつかない、ちよつと妙なものです。ブラジル人と結婚する人も若干はおりますけれど、非常に少いのです。

○篠崎幹事 すると、向うで成功したというのは一刻くらいですか。

○泉靖一氏 それは何をさつて「成功」とするかむすかしいんです。一心農業移民として、土地持になつたということをメルクマにしますと、七〇%であります、あとの三〇%は、小作といひますか、土地を借りてやる人あるいは農業労働者です。

○篠崎幹事 先ほどのお話の中へ、今まで農業技術で移民したのだけけれども、二世はそれが全部失われ、てしまふということになると、二世はどういうことになるわけですか。

○泉靖一氏 結局それはその二世自身の教育によるんですが、ブラジルほど教育というものはつきり出てくる所はないんです。

一般の社会が非常にメチャ／＼なんです。

だから三年四年の学校教育でも、非常に効果が現れてくる。いわゆるカボクロと言って、ブラジルの農夫がおりますが、これは農業技術はメチャクチャでして、マンジヨーカーという羊を植えるんですが、それは植えつ放し。それから豚を三三匹、鶏一、二羽飼って、マンジュヨーカーとトモロコシを植えて、自分も食って行くだけなんです。ところがこの連中は土地持なんです。それこそ日本人がその連中から土地を借りて、その連中を使って農業をやつて。奇妙キテレツです。地主を労働者に使つてという形で初めやつて行くんですけれども、そのうちにだん／＼日本が土地を買つて行くわけです。ところが農業技術はだん／＼とカボクロ的のものに落ちて行くわけです。二世の同化が進むと、つまり教育を受けないで同化して行くと、農業技術はカボクロ式農業になつてしまふ。今までのような高度の多角経営がさきなくなる。だから同化というよりも、ある意味では退化ですね。

○寺尾委員長 この本に、移民問題について日本人が大勢書いておりますが、こういうのは何をしてくる人たちですか。

○泉瑛一氏 これは、ナカオ、クマギという人は商業をやつてお金儲けた人です。この人は小学校しか出ていませんが、大金を儲けて、こういうことをやらなければいかぬというので、若い人を集めて、金を出して、研究費を出し、印刷費も全部この人が出してあります。それからアンダー、セーパーという人は、英語のスペイン語を出した人で、文化人で、日本語を教えたり、勉強したりして、定職をさたぬ人です。

○小山委員 二世に向うの大学を出た、ちゃんとした人はいませんか。

○泉瑛一氏 います。弁護士をやっております。サイトー、ヒロシ君は、大学を出て、大学の助手をやっております。ハンダ氏は、面白い人で、絵がきます。それが本職です。小学校しか出ない人ですが

なか／＼勉強家です。マスシという人は、パウリス文新聞の編集長です。

○寺尾委員長 文化的な仕事に従事してゐる二世、あるいは一世でもいいんですが、どのくらいあるのでしょうか。

○泉靖一氏 だん／＼ふえて来ております。二世の、大学出た人はだん／＼ふえまして、これは二世の層と一世の層との中間層です。こういう人たちは、日本語を替けるし諾めるし、ポルトガル語をできる、両方できるわけです。二世になると多々です。こういう人たちは、わかか、おそろく百人とおらないと思ひます。二世になると、何千人と思ひます。

○寺尾委員長 そういう方面で仕事して行く上において、何か種約というか、そんな不利はありますか、

○泉靖一氏 それはなによろです。向うの大学さえ出れば同じことゝ、別に日本人だからどうということはないです。

○寺尾委員長 よほど上の方に行つてゐる人がありますか。

○泉靖一氏 衆議院議員が一人出ました。今まではサンパウロの州会議員であつたのが、今度には連邦の議員になりました。大学では助教授くらい出ております。役人なんかにはまたあまり伸びておりません。と申しますのは、一九〇八年から参りましたが、一九〇八年の人はうんと少いです。ゴツと伸びましたのが一九二一年から一九四〇年までくらいの間で、これが大きくなれば急に日本人のインテリが出てくると思ひます。

○永井委員 中南米は人種的偏見はないよろですか。

○泉靖一氏 そうでございます。北米あたりと比べたら、若干はあるよろすけれども、メラニコ（白人）プロット（黒人）モラット（白人）と黒人の合の手）さういうものの次に、シヤポネーシというさ

のがあるようです。つまり日本人は、ブラニコにもならなければ、ブラツタにもならないし、黒人にもならない、何か別の民族というものが何となくしにあるように感じています。

○永井委員　シナ人はどうですか。

○泉崎一氏　ほとんど入っておりません。東洋人では日本人だけです。シナ人は、初めちようと入れたんですが、非常に拙いことがあったので禁止したんです。ですから北アメリカのように、シナ人と日本人というのは、向題はちつとも起らないです。

○永井委員　すると、日本人だけの向題ですね。

○泉崎一氏　そうでございます。だから拙いことが起るわけです。はっきり判りますからただ向うで割合に日本人に同情的な人類学者は、ブラシル人はほとんど混血なんです、白人といえど、インディアンとの血の混つていない者は、ほとんど少ないです、そこでインディアンを祖先だと鬼つてる、それこそ日本人を排斥するなら、われわれの祖先を排斥するということになつてくるんですね。

○永井委員　朝鮮人は入っておりませんか。

○泉崎一氏　ほとんどおりません。ただ一人おりました。

○寺尾委員長　この本はなか／＼面白いですが、こういう人たちは、自分の手で調査するということまでは、やつておらぬようです。泉さんのそのなど資料に引用していて。

○泉崎一氏　それは今まで頭をつかちの人で、調査するといつては、どうしていいかわからなかつたのです。私参りました、この人たちが手伝ってくれたのですから、この人たちが初めて自分で、移植民審議会から委嘱を受けて、戦後の移民の調査を始めてるようです。ところが戦後は妙なそのばかり入っておりますので、なか／＼いい結果は出ないだろうと思えます。戦前の資料としては割合に整っているのを調査すれば出てくるんですか、戦後はおそらく非常にむずかしいだろうと思えます。

○永井委員　そう一つ、ブラジル初の中南米の移民というものは、主として農業移民ですね。将来それは有望なものでしょうか。

また、高い旅費を使って送り込んで行くだけの価値があるかどうか、どう将来を達観したらいいでしょうか。

○泉靖一氏　こういうことが言えるんじゃないですか。中南米は日本人に対して必ずしも好感情はあつておりません、今日本人を入れろという中南米の態度の中に何かあるかということ、急速な工業化を図つてゐるわけです。そのために、一つは、農業労働者が枯渇して来るといふことが一つと、急速に工業化を図るためには、やはり技術者が必要だということから、とにかく何卒いいから入れようという気持がある。それが今の中南米の気持だろうと思ひます。これがある時期になつたらピシヤツと閉じてしまふ、そうすると、日本人は日本の四つの島にだけおつて、外に出すことはいないという考え方もあります。しかし、しかし、経済力の向題もありませんし、政治的の動きもあるかもしれません。そうすると、向うが門を開いてゐる間に、若干は入れておいた方がいいんじゃないかという気がいたします。

○永井委員　そうすると、将来は、工業移民というか、技術移民というか、熟練移民というふうなものを用意をして出すことが必要じゃないでしょうか。

○泉靖一氏　そうでございます。やはり技術移民あるいは企業自身を移して行く、そういうことをちろん考えなければならぬと思ひます。イタリヤみたいになりますと、これは大変なもので、外債收入の三分の一くらいが移民の送金です。日本がそこまで行くかどうかわかりませんが、ただこういうことが言えるんです。なんぼでもお入り下さいと言われておりますが、入る土地がだん／＼悪くなつて行つてゐるんです。南ブラジルにだん／＼入れた時代と、今アマゾンにだん／＼入れようという時代と、条件がうんと違ふわけです。

○永井委員 あなた、東南アジアにいらしたことはありますか。

○泉靖一氏 私はございません。ニューギニアだけしかございません。

○永井委員 東南アジアの、そういう意味の移民は、将来有望じゃないですかね。

○泉靖一氏 中南米の広大な棉菘地というものに何か魅力があるわけです。ところが私冗談に言ったことがあるんです。アマゾンならアマゾンに土地がないと考えたらどうだろうか、そうしたら何か知恵が出ないだろうか。たとえば蔬菜の栽培がうまく行かないんです。それでは、あれを温度だけと考えば、水中栽培をすればいいじゃないか。それを、土地が無限にあるものだから、それを使わなければならぬというように考える。ところがその土地が悪い。ところが土地を持ってれば、金持のように考える。そういう従来の物の考え方を一応御破算にしたらどうだろうかということを、アマゾンなどについて考えます。

○寺尾委員長 泉さんのお話を伺って感じたことは、やはりある程度の後継部隊が行かないと、今までの過去の努力というものが消えてしまふ虞れがあるということ、そのことがはつきり言えるわけですね。

泉靖一氏 言えると思います。そう一つは後継部隊を送る時期がありますが、戦後送つて、向うに住んでる日本人との間に、いろいろトラブルが起ります。これは物の考え方が全然違ふんですから、やむを得ないと思います。それをパツと送つたら必ずぶつかると言えます。労務協約というようなことになると、向うの日本人は、そんなことは全然夢に思っていない。すると、人が悪くなったと言われられるわけです。

○寺尾委員長 アブレというわけですね。

○泉靖一氏 だから、送るなら判断なく、切れないように送つてやらないといけないと思います。ある

時期送つて、ある時期送らないと、必ず両者のギャップが克服できずにしまします。

○寺尾委員長 何年か中断した人ですか。

○泉一氏 一九四一年から五三年まで、戦後最初の移民が到着したのは五三年です。

○寺尾委員長 十二三年隔いたわけですね、大きいね。

○泉一氏 だから呼寄せ移民の償付をやれば、向うの相手がしつかりしておりまして、割合に回収は確実でございます。それに向うに行つて、政府なり何なり面倒を見る必要がないわけです。集団移民となりますと、これは實際たいへんなことですよ。

○寺尾委員長 補助のようなもので与えれば、呼寄せ移民をしたいという状態はあるのですか。

○泉一氏 非常にあるのです。

○寺尾委員長 一方にその持つてくる技術が失われて行くということになると、人がいても、あまり労力にならぬ、そこを新しい呼寄せ移民を入れる必要があるというわけですね。

○泉一氏 そこを今でも、ここどう一ヶ月くらいの間にコチア農業共同組合のミノモトという理事が来ると思っています。これがブラジルで五千人の呼寄せ移民のわくをもらいました、サンパウロの近所ですが、そこに入れようというので、送考の方法や何かについて打合せに参ると思えます。おそらく外務省でやると思えます。だん／＼さういうものをやって行けば非常にいんどやないかと思えます。

○寺尾委員長 呼寄せ移民は、普通の移民よりも寛大ですね。普通の移民がでさなくなつた頃で、呼寄せ移民はできたんですが、どういう理由ですか、責任者があるからというわけですか。

○泉一氏 流民が出不いわけです、受入れる方が責任をまつてから。そう一つは、家族とか何とかいうことですよ。ですから、アメリカにも、禁止された後とがいふん呼寄せを入つております。

○島谷委員 今の計画移民をやる意味は、つまり呼寄せ移民をやる基盤をつくらうというわけですよ。イ

タリアみたいになく、さん在外イタリア人分おれば、呼寄せをどん／＼やれますが、日本人はわすか三
十万足らずですから、これを基盤にして呼寄せをやつてお知れてるですから、それと、計画移民でア
マゾンとかポリナイアとかに配置して、ブラジルに、今泉さんの言われたように、今後大体三十年か
そこいらの間、そういう計画移民を入れる何かありますから、その間に入れて、向うが移民を禁止し
た後は、呼寄せで行く。それが今外務省あたりを考へてる移民政策の基本です。

○小山委員　そうさしようね。

○鳥谷委員　それを考えないと、経済的に安全な呼寄せ移民に力を入れないと、なぜ計画移民なんかや
るんだという議論が出るんですけれど、それは今やつてる移民の本旨を理解していかないわけです。

○藤崎幹事　郷愁ということが出ましたが、教会に入らない人は、お寺なんか……。

○泉端一氏　日本のお寺がたくさんあります。本願寺など壁々たるものがあります。墓もあります、神
社はいけないのさないけれど、お寺はたくさんあります。

○藤崎幹事　トラホームのお話がございましたが、向うは結構などはどうですか。

○泉端一氏　多いです。それからマリアマが多い。

○永井委員　移住先の病院とか学校とかの施設は、吉田総理が決定して来た、あれはその方へ力を入れ
るという方針でしょうか。

○泉端一氏　今集団移民に入つてるのは、ブラジルの連邦政府が学校なり病院なりやつてるんです。ブ
ラジルはナシヨナリズムの強い国ですから、教育は非常にむずかしくて、日本人の日本語の先生が行
つてやるということはできない。十二才未満の子供に外国語を教へてはいけないことになつておりま
す。ポルトガル語以外には、必ずから教育は全部向うでやるわけです。

○山本委員　日本人の子をさいけないのですか。

○泉崎一氏　そちろん親が子供を教えるのはいいんですが、十二才以下の子供を收容する日本語学校に
いうようなものはいけないわけです。

○山本委員　宗教などどうですか、一世は仏教者が多いんですがいまいちよう。

○泉崎一氏　そうですね。

○山本委員　二世とやはり多いですか。

○泉崎一氏　いえ、だん／＼カソリックに変わって参ります。宗教の方は、カソリックが国教と言つてい
いくらい盛んです。憲法ではそちろん信教は自由でございいます。

○渡辺委員　体格はどうでしょうか。実は向うは食い物が違つたりして——やはり肉食が多いでしょう。

○泉崎一氏　日本人の体位は、ほとんどハワイと同様になつております。アマゾンには少し悪くなつてお
ります。(衣を見せる)

渡辺委員　体重は割合にいいですね。身長が百二十で、体重五十キロですね。大体ハワイと同じです
か。

○泉崎一氏　南ガラシルは、ほとんど同じでございいます。

○渡辺委員　南は食べ物はいいですか。

○泉崎一氏　怪生活が豊かです。ところがアマゾンの方はまだ数が少ないのさございいます。
また二世が十分出ておりませんので、それで値がちよつとあやしいところがございいます。

○渡辺委員　BCGだのツベルクリンなどやつておりますか。

○泉崎一氏　ツベルクリンは町の方はやつております。ところがBCGはやつていないさうです。

○渡辺委員　便所はやはり水洗式ですか。それと、大便を肥料に使いますか。

○泉崎一氏　絶対に使いません。

○渡辺委員　どこかに捨ててしまふのですか。

○泉端一氏　埋めてしまいます。絶対に使いません。ブラジルは非常に盛ります。

○永井委員　先ほどの泉さんのお話ですと、教育だの医療だの、そういう施設を後住先でやろうというのですね。

○鳥谷委員　あれは、そういう金ではありません。あれは商業的採算に乘る面だけをやるんです。だから向うの営農資金、それから日本から中小工場を向うに移す場合の設備資金、こういうそろばんに乘るやつです。衛生や医療はそろばんに乘りませんから、国家の財政資金でやるわけです。

○永井委員　経済資金ですね。

○鳥谷委員　そうですね、アメリカのやつは。

○寺尾委員長　一世の国籍は向うにないのですか

○泉端一氏　どつちでもいいんです。帰化すればいいんです。

○寺尾委員長　日本の国籍はどうなりますか

○泉端一氏　喪失いたします。前は二重国籍をやつたんですが、今はそれができなくなつてしまいました。た。

○小山委員　アメリカの土地主義ですか。

○泉端一氏　そうですね。

○小山委員　ブラジルで、イタリア人の排斥というようなことはないですか。

○泉端一氏　日本人ですね。ドイツ移民が一時問題になりましたが。

○渡辺委員　イタリアは、排斥するだけの対抗勢力がないじゃないですか。サンパウロの黙界など嚴として存在してるから、自分らの地盤がなくなつてしまふわけです。

ところが、ドイツはあるわけだ。南三州に地盤を持っておつて、全般的に地盤がないから、排斥といふことが問題になるんです。それから政治的勢力から見れば偏してゐるからです。

○永井委員 日南産業というのは、政府は利用してありますか。

○島谷委員 今ブラ拓の土地は個人に分けてしまつて、ブラ拓は買収費を取上げて、今の向うのブラ拓に使つてゐるんです。あと四、五年は使いきるので、そのあとどうするかということが問題になつてゐるわけだ。

○永井委員 政府は所有権を持っていないんですか。

○島谷委員 日南の株を持つてゐるわけだ。日南がブラ拓に投資した、その関係で、つまりブラ拓としては、財産をブラ拓に働いてゐる人の俸給になつて、年々財産をすつてゐるわけだ。あと四、五年はなかりなす。従つてこつちの会社も財産がなくなつてしまふわけだ。

○泉靖一氏 とにかく外国ですから、日本政府が土地を持つてゐるわけに行かないです。殊にブラジルはナニヨナリズムの強い所だ、会社も日本人が代表になつたら、会社をつくれないです。カイライも、せいから、向うの人でないといけないのです。

○藤崎幹事 漁業はどうですか。

○泉靖一氏 今向うで盛んにやつております、これは儲かるらしいです。

○永井委員 それは漁民として移住したんですか。

○泉靖一氏 そうじやありません。ヒラメとかいろいろな魚です。

○寺尾委員長 大した漁獲はないのさしようね、産業として。

○泉靖一氏 漁民というものがあまりおらぬすからね。大体インディアンの漁業技術は、全部川なんです。海魚はないんです。白人もそのまゝ真似してゐる。アマゾン地帯など、白人がインディアンと同じ

ようにハンモックに寝て、奥を寝るのにろろ射つたりしてゐる。

○永井委員 アマゾンの奥は、大きくて不味いからダメなんですよ。

○泉靖一氏 モリを刺すんです、草具を枯びつけて。

○小山委員 スポーツだね、

○寺尾委員長 よく南方に行くと、南方ボケすると言いますが、アマゾン地方は熱帯地方ですが、アマゾン・ボケということはないですか。

○泉靖一氏 あれは、ただ暑いからボケるといふのじゃなしに、生活の仕方がノンビリしてゐるからボケて来るんじゃないでしょうか。

○鳥谷委員 一年中同じようですから、季節的の感覚が鈍るんですね。日本のように春夏秋冬がはつきりしてないから、何かあつて、それがいつのことだったか、ちよつと思ひ出せない。南方ボケといふのは、そういうことじゃないですか。

○泉靖一氏 アマゾンは人口がふえないと経済生活は高くなりません。市場がないわけですから。コロンビアのような、飛行機で運ぶと採算の合う物ならいいんですけど、ちよつと重い物ですと、大体アマゾンの産物の一番の市場はニューヨークとか南アメリカです。河を約千マイル、それから四千マイル五千マイル運ばないと市場に行かない。そこが問題です。だからアマゾン自身の人口がふえて、流通がつかうようになればいいんですが、どれまゝが問題です。アマゾン開発計画をどこを組んでるわけです。憲法で連邦政府の収入の六%、各地方自治体の六%を集めて、アマゾン開発審議会というものをつくつて、そこを開発計画をやる、その狙いは最初は交通と人口の問題です。

○永井委員 大体、アメリカ移民を暫くの間は有望ですね。

○泉靖一氏　どうですかね、暫くの間は、

○篠崎幹事　暫くと言つては二、三年では。

○泉靖一氏　そんなことはないでしょう。

○永井委員　十年くらいはあるでしょう。

○小山委員　あとは政治問題だね

○寺尾委員長　それではこれで泉さんの御報告を一応終ることにいたします。どうぞありがとうございます。

